

春秋時代における獣面型短剣の編年研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31445

春秋時代における獣面型短剣の編年研究

八木 聡

はじめに

北方系青銅器を特徴付ける遺物の一つとして、短剣を挙げることができる。中でも鐔に獣面を飾る獣面型の短剣は、柄頭や柄、鐔に中原的な表現が用いられており、北方系文化と中原文化の架け橋となる重要な遺物である。

これまで獣面型は、河北で出土する花格剣⁽¹⁾と陝西を中心に出土する秦式短剣⁽²⁾に分けられて考察されてきた。両型式の関係については、秦式短剣から花格剣に柄の文様で影響を与えたという考え(張天恩 1995, p.851)や、秦式短剣は北方文化からの流入(陳平 1995, p.369)、鐔の獣面紋は列国による一時期の流行(李学勤 1993, p.17)、宇村出土から秦式短剣と花格剣が派生した(楊建華 2004, p.82)という考えが挙げられる。

今までの研究を振り返って言えることは、短剣の型式分類やいわゆる秦式短剣と花格剣の比較に重点がおかれていたため、系統的な編年や編年を基にした型式間の影響関係について論じられてこなかったということである。特に花格剣は鄭紹宗の発表した資料に負うところが大きく(鄭紹宗 1984, p.37-49)、共伴遺物が分からないことから、具体的な年代がはっきりとしなかった。したがって、秦式短剣と花格剣の類似性は指摘することが出来ても、両者の影響関係について考察を行なうことは困難であった。

近年では、発掘事例の増加に伴い、獣面型の資料が各地で増加してきたため、本稿では各型式の編年と絶対年代、型式間の影響関係を明らかにしていく。また、各型式の地理的な拡がりにも注目することで、北方系文化がどういった地域と関係を持っていたのかについても考察を行なう。ただし、出土資料はいまだに十分とは言えない部分があり、編年を行なううえで一部コレクション資料を援用する。

各時代区分については、便宜的に以下の区分に従う。

まず西周時代は、前 1027 年から前 771 年とし、均等に前・中・後の三期に区分する。春秋時代は、770 年から 454 年までとし、前・中・後の三期に区分する。

型式分類

本稿では、これまで秦式短剣、花格剣というように分類されてきた短剣を獣面型としてまとめたうえで、鐔や柄、柄頭の表現によって各型式に分類する。具体的な分類は以下の通りである。

I 型：鐔の獣面が全体的に角張っており、剣身との境が水平になる型式。柄の表現により、4 つの型式に細分可能である。

I a 型：柄頭に二匹の龍が向かい合う紋様を持つ短剣。柄の部分には装飾は見られない(図 1-2, 6, 14)。

I b 型：柄を蟠螭紋で飾る短剣。蟠螭の目の部分がかぼんでおり、もともとは石が象嵌されていたと思われる(図 1-1, 3, 7, 15)。

I c 型：柄に突起物が螺旋状に配置され、柄の断面がソケット状になる型式(図 1-8, 16)。

I d 型：柄と柄頭の境が明確でなく、柄頭に向かって緩やかに拡がる形状の柄を持つ型式(図 1-9)。

II 型：獣面が柄頭と鐔に、互いが反転する形で表現される短剣。柄には虺龍紋が見られる。(図 1-5)。

III 型：鐔の獣面の左右両端に牙と思われる表現が見られる型式。柄頭が球形で柄の断面が八角形になる III a 型(図 1-11, 17)と柄に蟠螭紋を飾る III b 型(図 11-12, 13, 18, 19)に細分できる。

IV 型：他の獣面型と比べ、鐔の獣面が逆さになる型式。柄の側面に鳥頭紋が縦に並ぶ a 型(図 1-20)と、柄が螺旋形になる b 型(図 1-21)に分けられる。

編年

上記の分類をもとに、ここでは獣面型がどのように

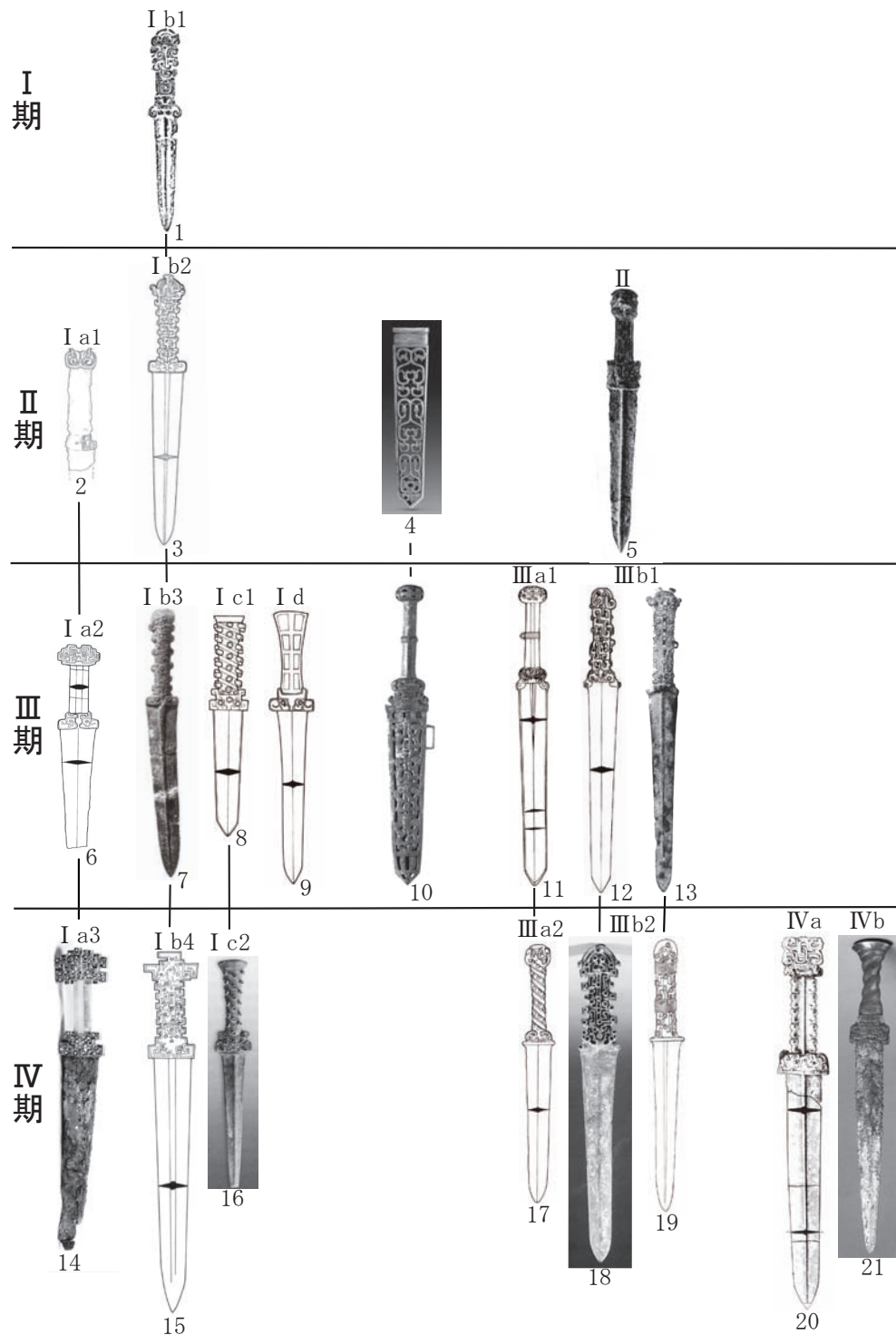


図 1. 編年図

1. 宇村 1 号墓 2. 圓頂山 2 号墓 3. 大堡子 I 25 号墓 4. 韓城 27 号墓 5. 南山根 101 号墓 6. 隴県出土
7. 東京国立博物館所蔵品 TC-513-3 8. 鳳翔八旗屯 9. 圓頂山 3 号墓 10. スtockホルム美術館
11. 玉皇廟 17 号墓 12. 玉皇廟 300 号墓 13. 東京国立博物館 TJ-5662 14・15. 益門村 2 号墓
16. 陝西歴史博物館所蔵品 17. 玉皇廟 224 号墓 18. 懷来大古城 19. 葫蘆溝 24 号墓 20. 琉璃閣 60 号墓
21. 琉璃閣甲墓

変化していったかを見ていく。

I 期

獣面型の中で最も古い型式は、I b1 型である(図 1-1)(許俊臣・劉得禎 1985, p.350 図 3-1)。柄頭に見られる獣が人首をくわえる表現は類例がないが、鐔の獣面や柄を蟠螭紋で飾る点は、後の I b 型につながるものとする。

II 期

II 期の獣面型として、I a1 型と I b2 型、II 型を挙げられる(図 1-2, 3, 5)(甘肅省文物考古研究所・礼県博物館 2005, p.13 図 10-1、早期秦文化連合考古隊 2008, p.42 図 38-4)。いずれも鐔や柄に表現されている紋様が、非常に精緻である点が共通している。I a1 型と I b2 型は、中原文化の遺跡から出土しており、獣面や蟠螭紋が短剣に反映された点について、大きな疑問はない。しかし、II 型が出土した南山根は北方系文化の遺跡であり(遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1973, 図版 6-6)、どのような経緯で II 型の短剣が造られたのか、解釈が非常に難しい。鐔の獣面や柄の虺龍紋が、忠実に中原の紋様を表現しており、他地域から南山根に持ち込まれた可能性が考えられる。分布地については、遼寧地域から甘肅の礼県まで広がっており、早い時期から広範囲に広がっている点を指摘出来る。

II 期には、金製の鞘も出土している(図 1-4、図 2-8)(陝西省考古研究院・渭南市文物保護考古研究所・韓城市文物旅遊局 2007, p.15 図 20-3、蔡慶良・孫秉君 2007, p.165)。鐔に獣面を表現した玉剣が共伴していることから(図 2-10)(蔡慶良・孫秉君 2007, p.167)、獣面型とのつながりを見て取れる。年代は、II 型を出土する南山根 101 号墓が西周後期から春秋前期と考えられており(遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1973, p.38)、II 型の柄の装飾と類似した玉管を出土する韓城 27 号墓が春秋前期であることから(図 2-11)(蔡慶良・孫秉君 2007, p.101 p.31)、春秋前期とする。

III 期

III 期になると、I a 型、I b に紋様の退化が見られる(図 1-6, 7)(肖琦 1991, p.81 図 5、東京国立博物館 2005, p.38 図 9)。I a2 型、I b3 型の両型式とも II 期の短剣と比べ、柄・柄頭の装飾を龍とし

て識別することが困難になる。I 型は、この時期に新たに I c 型と I d 型も見られるようになる(図 1-8, 9)(趙叢蒼 1991, p.9 図 5-5、甘肅省文物考古研究所・礼県博物館 2002, p.22 図 25-5)。

また主に I 型は、渭水に沿った地域でのみ出土が見られるが、この時期には I a2 型と I b3 型に類似した III a1 型、III b1 型が(図 1-11, 12, 13)(北京市文物研究所 2007, p.925 図 580-3, p.930 図 583-1、東京国立博物館 2005, p.38 図 10)、燕山地域の玉皇廟文化でも出土するようになる。特に I b3 型と III b1 型は、柄に表現される崩れた蟠螭紋が、ほぼ同じ表現であることから、同時期の短剣であると言える。III a1 型、III b1 型は、鐔の獣面や柄にループがつく点が共通しており、やはり同時期と考える。年代は、春秋前期よりも下ると考えられることから、春秋中期とする。

III 期には、II 期と同様に鞘がみられる(図 1-10)(東京国立博物館 1997, p.65 図 111)。II 期のものと同様に、全体が透かし彫りになっている。全体の形状や獣面型の剣がセットになっている点も共通しており、II 期の流れを汲んで造られたと言える。

IV 期

I 型は鐔の獣面や柄の蟠螭紋の退化が進み、紋様が何を表わしているのか判別できなくなる(図 1-14, 15, 16)(上野の森美術館 2004, p.83 図 47、宝鶏市工作隊 1993, p.4 図 7-1、張天恩 1995, p.849 図 5-1、代麗鵬 2011, p.87 図 7)。柄頭、柄、鐔は全体的に柱状の突起物が見られる。I a3 型と I b4 型は突起の先端にトルコ石が象嵌され、柄が青銅から金へと変わり、刃部が鉄となる(図 1-14, 15)。I c2 型について筆者は、陝西歴史博物館で実見したことがある(図 1-16、図 5-1, 2)。柄頭頂部から柄に向けて菱形の小孔があいており、全体の形状はソケット状ではなくなる。

III a2 型、III b2 型も紋様に退化が見られ、鐔の部分の獣面がなくなる(図 1-17, 18, 19)(北京市文物研究所 2007, p.948 図 596-1、中国青銅器全集編輯委員会 1995a, p.140 図 138、北京市文物研究所 2009, p.267 図 187-2)。懷来大古城の短剣は鐔がないが(図 1-18)、玉皇廟 224 号墓や葫蘆溝 24 号墓出土の短剣は(図 1-17, 19)、一字形の鐔が見られる。III 型は柄の側面に付けられていたループも失

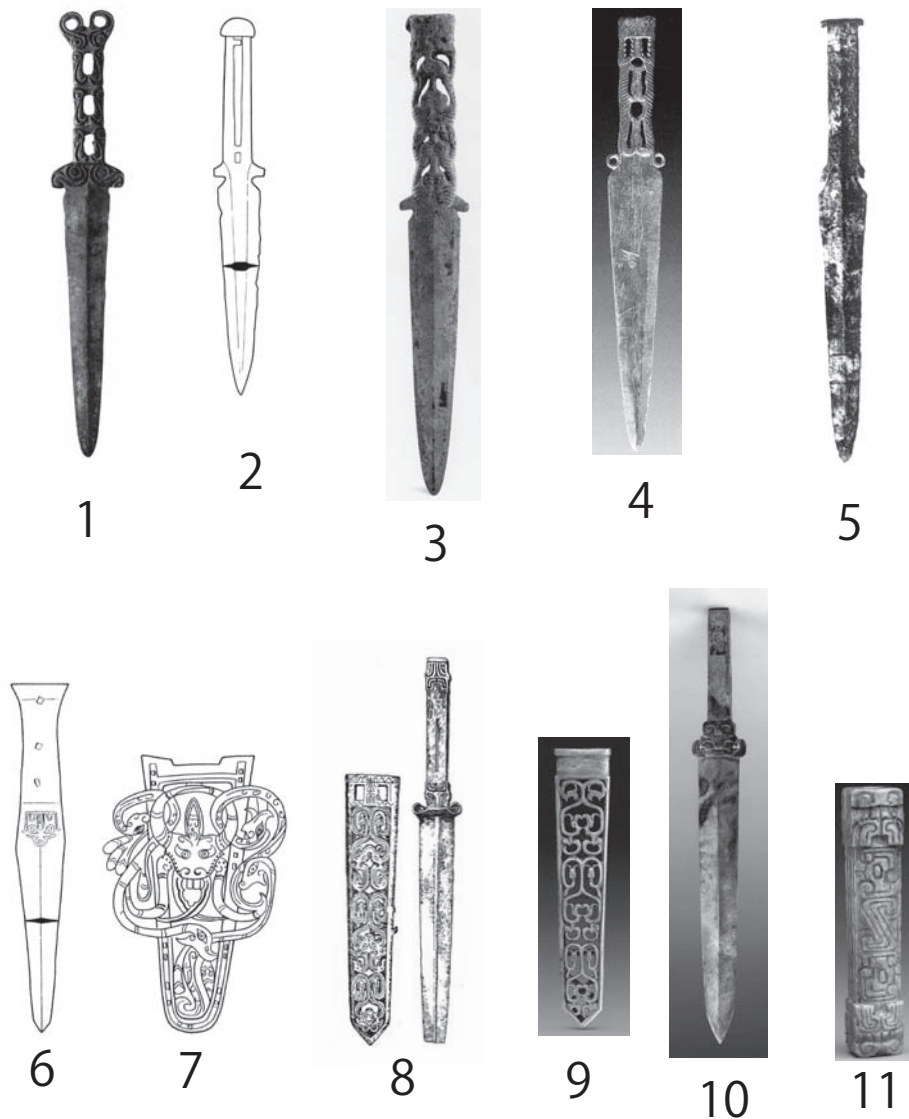


図 2. 関連資料

1. スtockホルム美術館所蔵品 2. 昌平白浮 3 号墓 3. 鄂爾多斯青銅器博物館
4. 原州区 5. 南山根 101 号墓 6・7. 少陵原 280 号墓 8. ソーヤー・コレクション
9・10・11. 韓城 27 号墓

*1. 2. 4-10 : 縮尺 1/5、3. 11. 縮尺不明

われる。

また、IV期になると鐔の獣面が逆さまになるIV型が出土する(図1-20, 21)。IV a型は柄に鳥頭紋が見られるが(図1-20)(陳瑞麗 1967, 図版 10)、類似したものはストックホルム美術館所蔵の、いわゆる「触角型」の短剣にも見られる(図2-1)(東京国立博物館 1997, p.61 図 103)。触角型の短剣は、北辛堡遺跡で出土するが(河北省文化局文物工作隊 1966, p.235 図 6-7)、オルドス地域や寧夏・甘肅との関係が強い。

そのためIV a型は、渭水周辺地域や玉皇廟文化と関係の深いこれまでの獣面型とは、一線を画する型式と言える。一方、IV b型は螺旋形の柄や柄頭頂部から柄に向かって孔があいている点がI c型に類似している(図1-21)(河南博物館・台北國立歴史博物館 2003, p.128)。代麗鵬が指摘するように(代麗鵬 2011, p.88)、I型の影響を受けてIV b型が造られた可能性がある。しかし、なぜI型の鐔の獣面がすでに退化している時期にIV b型が造られたのか、IV型の中に触角型やI

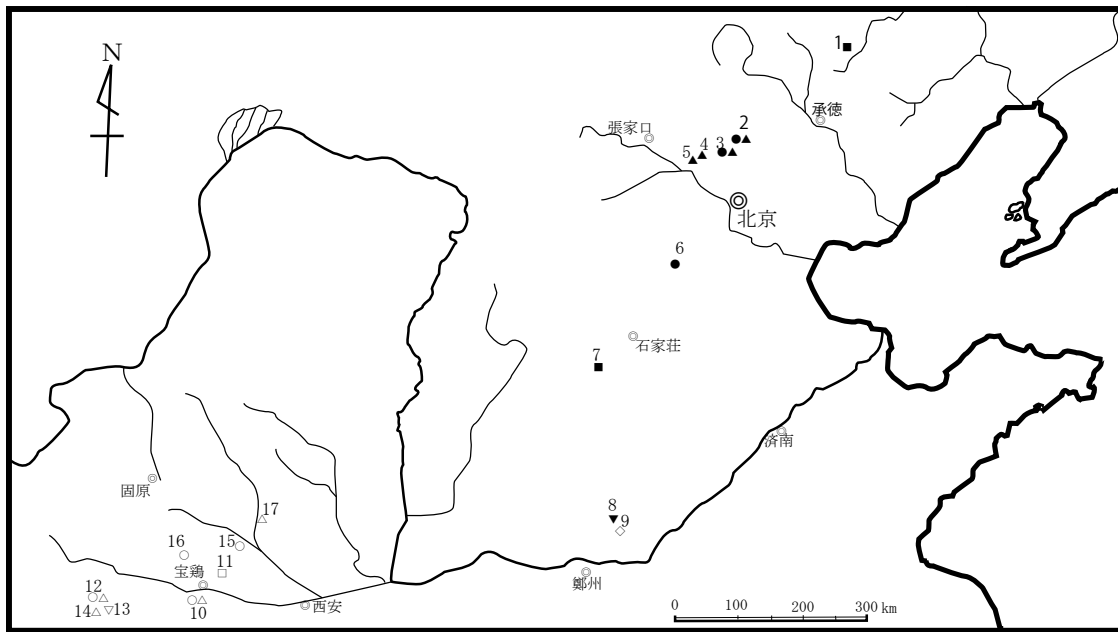


図3. 遺跡分布図1. 全体図

○Ⅰa型 △Ⅰb型 □Ⅰc ▽Ⅰd ■Ⅱ型 ●Ⅲa型 ▲Ⅲb型 ▼Ⅳa型 ◇Ⅳb型

1. 南山根M101号墓 2. 葫蘆溝24号墓 3. 玉皇廟 4. 甘子堡 5. 懷来大古城 6. 滿城漢墓
7. 昔陽大寨 8. 琉璃閣60号墓 9. 琉璃閣甲墓 10. 益門村2号墓・譚家莊 11. 八旗屯 12. 圓頂山2号墓
13. 圓頂山3号墓 14. 大堡子Ⅰ25号墓 15. 景家莊 16. 隴県 17. 宇村1号墓

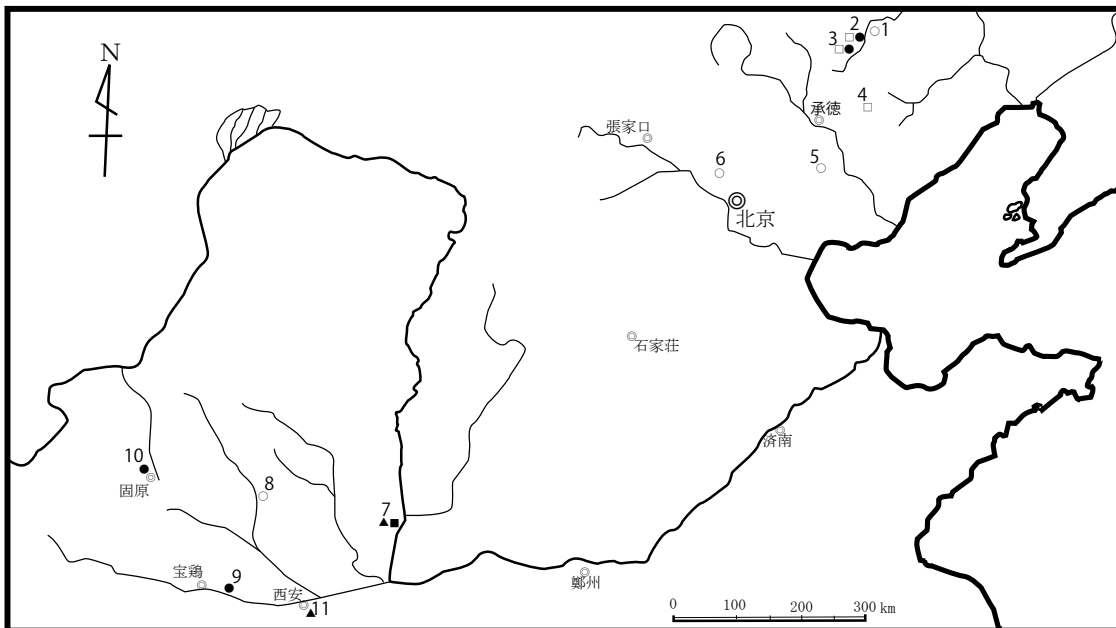


図4. 関連遺跡分布図

○カラスク型 □退化したカラスク型 ●虎型 ■玉剣 ▲鞆

1. 大荒地1号墓 2. 汐子北山嘴750号墳 3. 南山根101号墓・天巨泉7301号墓・瓦房中791号墓・小黑石溝
4. 東南溝6号墓 5. 小河南村 6. 昌平白浮2・3号墓 7. 韓城梁帶村27号墓 8. 合水九站24号墓
9. 西高泉村1号墓 10. 原州区 11. 少陵原280号墓

型に類似した短剣が混在しているかについては分らない。

年代は、益門村の年代から(宝鶏市工作隊 1993, p.13)、春秋後期と考える。獣面型は、後に戦国時代に入ると、出土が見られなくなる。

考察

ここでは、今までに見てきた編年の背景に、何を見て取れるかについて述べていく。はじめに、獣面型のルーツについて考察を行なう。結論から先に言うと、西周中期に見られる剣身基部に人面(あるいは獣面)を飾る短剣が獣面型の祖形であると考え。そして同じく西周中期におけるカラスク型の分布地域が下地となり、獣面型が広がったのである⁽³⁾。以下その根拠について述べていく。

まず、獣面型のルーツについてであるが、祖形として少陵原 280 号墓から出土した資料を挙げることができる(図 2-6)(陝西省考古研究院 2009, p.387 図 379-1)。理由は、獣面型同様に剣身と柄の境に人面が飾られており、柄と剣身が一鑄式で造られているためである。更に、共伴している鞘(図 2-7)(陝西省考古研究院 2009, p.387 図 379-2)もⅡ期に属する韓城 27 号墓出土の鞘につながる可能性がある。なぜなら鞘全体が透かし彫りになっており、鞘全体に龍が表現されている点、柄と剣身の境に獣面あるいは人面を飾る短剣が共伴している点が共通するからである。北方系青銅短剣の剣鞘の起源として、高濱が中原系の剣鞘を挙げており(高濱 1982, p.105-107)、少陵原の資料は高濱の指摘を裏付けるものと言える。

次に、獣面型の分布地域のルーツについて考察する。結論はすでに述べたが、根拠として第一にカラスク型(図 2-2)(北京市文物管理处 1976, p.253 図 9-2)が遼寧地域から北京、合水にかけて分布しており、獣

面型の分布と類似する。第二にカラスク型同様に虎型(柄に向かい合う虎を飾る短剣)(図 2-4)(寧夏固原博物館 2003, p.71 図 37)の短剣も遼寧、陝西の西高泉村、寧夏の原州区に分布しており(図 4)、獣面型に近い拡がりを見せる。第三に鄂爾多斯博物館が所蔵している短剣の中に、全体的にはカラスク型だが、柄は虎型の短剣が存在する(図 2-3)(鄂爾多斯青銅器博物館 2006, p.50)。短剣の由来は不明であるが、カラスク型と虎型を結ぶ資料と言える。二つの型式は全体の形状や装飾の比較から、異なるルーツを持つと思われる、折衷的な短剣の存在は、カラスク型と虎型を出土する遺跡に交流があった可能性も示唆するものと考え。第四に南山根 101 号墓では、カラスク型が退化したと思われる短剣(図 2-5)、虎型、獣面型が共伴している(遼寧省昭烏達盟文物工作站・中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1973, 図版 6-4, 5, 7)。

以上、カラスク型、虎型、獣面型は分布が類似している点、カラスク型と虎型の折衷的な短剣が存在する点、南山根 101 号墓で退化したカラスク型と虎型、獣面型が共伴していることから、上記の三つの型式を出土する遺跡あるいは地域には、つながりがあったと言える。年代はカラスク型が西周中期とされ、虎型、獣面型が春秋前期と考えられることから、西周中期には存在していた地域的なつながりは、脈々と春秋時代まで続き、獣面型はその地域的なつながりの中で発展していったと考える。

Ⅱ期には、遼寧から甘肅まで獣面の出土が見られるが、分布の中心は渭水周辺地域にあったと言える。理由は、第一に渭水周辺地域以外での出土が非常に少ない点である。現時点で確認できるものは、Ⅱ型に属する南山根 101 号墓出土例(図 1-5)と昔陽大寨出土例(中国青銅器全集編輯委員会 1995b, p.182 図 203)の 2 点である。北方文化の遺跡に限定すれば、南山



1



2

図 5. 陝西歴史博物館所蔵品

1・2: 筆者撮影

根 101 号墓の 1 例のみである。一方 I a1 型と I b2 型は、圓頂山 2 号墓 (甘肅省文物考古研究所 礼県博物館 2005) や大堡子 I 25 号墓 (早期秦文化聯合考古隊 2008, p.42 図 38-4、鳳翔八旗屯 (陝西省雍城考古工作隊、吳鎮烽、尚志儒 1980, p.84 図 23-2) で計 4 本が出土している他、I a 型に類似した獣面の鐔を持つ玉剣が、韓城 27 号墓で出土している (図 2-10) (陝西省考古研究院・渭南市文物保護考古研究所・韓城市文物旅遊局 2007, p.20 図 27-6、蔡慶良・孫秉君 2007, p.167)。

第二に、韓城 27 号墓で II 型に関連した資料が多く見られる点である。具体的には金製の鞘や II 型と同様の装飾を持った玉管を挙げることができる (図 2-9, 11)。金製の鞘は同様の資料が、ソーヤー・コレクションにおいて II 型とセットとなっていることから (図 2-8) (Max Loehr 1949, p.53 図 9)、II 型との関連が窺える。

以上のことから、II 期における獣面型の分布中心は、甘肅の礼県から陝西省の韓城までの地域にあったと言える。また、韓城では II 型に関連した資料が多く見られることから、南山根 101 号墓で出土する II 型は、韓城周辺の地域からの流入である可能性が考えられる。

次に、III 期における獣面型の拡がりについて見て行く。これまで燕山地域の玉皇廟文化と他文化との関係という点では、燕との関係が重要視されてきたが (宮本 2000, p.296、靳・王 2001, p.43-72、鄭君雷 2005, p.69-75)、獣面型においては宝鶏を中心とした渭水周辺地域との関わりを見て取ることができる。

III 期になると獣面型は、燕山地域でも出土する。いずれも玉皇廟文化に属する遺跡であり、獣面の表現は I 型とは異なる。各型式の拡がりについて見ると、I 型が渭水沿いに分布している反面、III 型は燕山地域に分布していることが分かる (図 3)⁽⁴⁾。I 型と III 型では鐔の獣面の表現、分布地に違いが見られることから、型式の違いを地域的な特色とし捉えることが可能である。

一方で、I a2 型、I b3 型と III a1 型、III b1 型は、柄の装飾に類似が見られる (図 1-6, 7, 11, 12)。特に I b3 型と III b1 型の柄の紋様はほとんど同じものである。I a2 型、I b3 型と III a1 型、III b1 型が類似しており、III a 型、III b 型が II 期に存在しない点、

韓城 27 号墓の鞘からストックホルム美術館の鞘への流れを見られる点から、渭水周辺地域からの影響を受けていたことが考えられる。III 型が燕山地域以外では出土しないことを加味すれば、III 型は渭水周辺地域からの影響のもと、燕山地域で造られたと言える。

IV 期になると、獣面を逆さに表現した IV 型が出土するようになり、オールドス地域や渭水沿いの地域とのつながりを窺うことができる。しかし、IV 型以外の獣面型はすでに鐔の獣面が退化しており、どのような経緯で IV 型が造られたかは、今後の課題である。戦国時代に入ると獣面型の出土は見られなくなる。背景には玉皇廟文化の衰退が考えられるが、渭水周辺地域での獣面型の出土にも影響を与えているかについては、資料の増加を待って考察を行ないたい。

これまで編年の背景について考察を行なったが、全体を通して分かることは、北方系文化が渭水沿いの地域の影響を受けている点である。春秋前期には獣面型の短剣そのものが遼寧地域に伝わり、春秋中期には燕山地域で短剣の装飾に関して影響を受けたと考える。

結語

本稿では獣面型の編年を通して、渭水周辺地域で発展した獣面型が、夏家店上層文化や玉皇廟文化に影響を与えていたことを明らかにすることが出来た。今回は特に獣面型の編年と分布から見えてくる、地域間のつながりにスポットを当てた。しかし、北方系文化自体が時代性と地域性を持っており、今後は他の北方系青銅短剣の編年と、各地域の北方系文化が他地域とどのような関係を持っていたかが課題になると考える。

註

- (1) 鄭紹宗が河北で出土する、中原の影響を受けて造られた北方系青銅短剣に対して与えた名称 (鄭紹宗 1984, p.45)。
- (2) 張天恩が、陝西で出土する獣面型に対して与えた名称 (張天恩 1993, p.25)。
- (3) 昌平白浮遺跡の出土品の中に、カラス風の短剣で柄頭に動物の頭を表現したのが見られる (北京市文物管理处 1974, p.253 図 9-4, 5)。おそらく殷代後期の獣首ヒから影響を受けていると思われるが、両者の関係は今のところ不明である。
- (4) 燕山地域以外でも満城漢墓で III b1 型が出土しているが (中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处 1980, p.82 図 55-3)、高濱が述べている通り (高濱 1982, p.116) 伝世の結果として捉える。

参考文献 (五十音順)

- 上野の森美術館『大兵馬俑展』2004 産経新聞社 p.83 図 47.
- 王占奎・水涛「甘肅合水九站遺址発掘報告」『考古学研究(三)』1997 科学出版社 pp.300 - 477.
- 鄂爾多斯青銅器博物館『鄂爾多斯青銅器』2006 文物出版社 p.50.
- 河北省文化局文物工作隊「河北懷來北辛堡戰國墓」『考古』1966 - 5 pp.231 - 242, p.235 図 6 - 7.
- 河南博物館・台北國立歷史博物館『輝県琉璃閣甲乙二墓』2003 文物出版社 p.128.
- 賀勇、劉建中「河北懷來甘子堡楚墓的春秋墓群」『文物春秋』1993-2 pp. 23-40, pp.75.
- 甘肅省文物考古研究所 礼県博物館「甘肅礼県圓頂山 98LDM2、2000LDM4 春秋墓」『文物』2005-2 pp.4-27 p.13 図 10 - 1、2.
- 甘肅省文物考古研究所 礼県博物館「礼県圓頂山春秋秦墓」『文物』2002-8 p.20 図 5 - 1.
- 許俊臣・劉得禎「甘肅宇村出土西周青銅器」『考古』1985 - 4 pp.349 - 352 図 3 - 1.
- 靳楓毅・王繼紅「山戎文化所含燕与中原文化因素之分析」『考古學報』2001-1 pp.43-72.
- 建平県文化館・朝陽地区博物館「遼寧建平県の青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』1983-8 pp.679-694, pp.713
- 興隆県文物管理所・王峰「河北興隆発現商周青銅器窖藏」『文物』1990 - 11 pp.57-58.
- 蔡慶良・孫承君『芮国金玉選粹』2007 三秦出版社 pp.101 図 31、pp.164 図 61、pp.166 図 62、pp.246 図 93.
- 肖琦「隴県出土的匈奴文物」『文博』1991 - 6 pp.79-81 P.88 p.81 図 5.
- 陝西省考古研究院『少陵原西周墓地』2009 科学出版社
- 陝西省考古研究院・渭南市文物保護考古研究所・韓城市文物旅遊局「陝西韓城梁帶村遺址 M27 発掘簡報」『考古与文物』2007 - 6 pp.3-22 p.15 図 20 - 3、p.20 図 27 - 6.
- 陝西省雍城考古隊「1982 年鳳翔雍城秦漢遺址調查簡報」『考古与文物』1984-2 p.30 図 7.
- 陝西省雍城考古工作隊、吳鎮烽、尚志儒「陝西鳳翔八旗屯秦國墓葬発掘簡報」『文物資料叢刊 3』1980 pp.67 - 85 p.84 図 23 - 2.
- 早期秦文化連合考古隊「2006 年甘肅礼県大堡子山東周墓葬発掘簡報」『文物』2008-11 pp.30 - 49 p.42 図 38 - 4.
- 高濱秀「オルドス青銅短劍の型式分類」『東京国立博物館紀要』18 号 1982 pp.95-131.
- 中国社会科学院考古研究所『考古精華』1993 科学出版社 p.234 図 193.
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理處『滿城漢墓発掘報告』1980 文物出版社 北京.
- 中国青銅器全集編輯委員會『中国青銅器全集 8』1995a 文物出版社 p.140 図 138.
- 中国青銅器全集編輯委員會『中国青銅器全集 9』1995b 文物出版社 p.140 図 138.

- 代麗鵬「早期玉劍具研究」『文物』2011 - 4 pp.84 - 89 p.87 図 7.
- 趙叢蒼「鳳翔出土一批春秋戰國文物」『考古与文物』1991 - 2 pp.2 - 13 p.9 図 5 - 5.
- 張天恩「秦器三論 - 益門春秋墓幾個問題淺談」『文物』1993-10 pp.20-27
- 張天恩「再論秦式短劍」『考古』1995 - 9 pp.841-853 p.842 図 1 - 1、p.849 図 5 - 1.
- 陳瑞麗「戰國時代的一把包金劍」『歷史語言研究所集刊』第三十七本 1967 中央研究院 pp.221 - 235 図版 10.
- 陳平「試論宝鷄益門二號墓短劍及有關問題」『考古』1995-4 pp.361-375.
- 鄭君雷「戰國燕墓的非燕文化因素及其歷史背景」『文物』2005-3 pp.69-75.
- 鄭紹宗「中国北方青銅短劍的分期形制研究」『文物』1984-2 pp.37-49.
- 東京国立博物館『大草原の騎馬民族 - 中国北方の青銅器 -』1997 p.61 図 103、p.65 図 111
- 東京国立博物館『中国北方系青銅器』2005 竹林舎 p.38 図 9・10
- 寧夏固原博物館『固原歷史文物』2003 科学出版社 p.71 図 37
- 北京市文物管理處「北京地区的又一重要考古収獲 - 昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』1976-4 pp.246-258, pp.228 p.253 図 9 - 2.
- 北京市文物研究所『軍都山墓地 玉皇廟』2007 文物出版社 p.925 図 580 - 3、p.930 図 583 - 1、p.921 図 577 - 3、p.923 図 579 - 2
- 北京市文物研究所『軍都山墓地 葫蘆溝与西梁塋』2009 文物出版社 p.267 図 187 - 2.
- 宝鷄市考古工作隊「宝鷄市譚家村春秋及唐代墓」『考古』1991 - 5 pp.392 - 399.
- 宝鷄市工作隊「宝鷄市益門村二號墓春秋墓発掘簡報」『文物』1993-10 pp.1 - 14 p.4 図 7 - 1.
- 宝鷄市博物館・宝鷄県図博館「宝鷄県西高泉村春秋秦墓発掘記」『文物』1980-9 pp.1-9.
- Max Loehr, "Ordos Daggers and Knives: New Material, Classification and Chronology", *Artibus Asiae* Vol.XII, 1949.
- 宮本一夫「中国古代北疆史の再構築」『中国古代北疆史の考古学的研究』2000 中国書店 pp. 301-327.
- 楊建華『春秋戰國時期中国北方文化帶的形成』2004 文物出版社
- 李学勤「益門村金、玉器紋飾研究」『文物』1993 - 10 pp. 15-19.
- 劉得禎・朱建唐「甘肅靈台県景家莊春秋墓」『考古』1981 - 4 pp.298 - 301.
- 遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国社会科学院考古研究所東北工作隊「寧城縣南山根的石槨墓」『考古學報』1973 図版 6 - 4、5、6、7.
- 寧城県文化館・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業「寧城縣新發現的夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資料叢刊』9 1985 pp.28 - 53.